

トク・ピシンの従属節を導く *sapos* をめぐって

On the Nature of *sapos* of Subordinate Clause in Tok Pisin

岡 村 徹

公立小松大学

Abstract: The conjunction ‘if’ corresponds to *sapos* in Tok Pisin, the language spoken in Papua New Guinea. This is the most common way of expressing a condition and is frequently used. It generally comes first in a sentence and is usually connected to what follows by *orait*. Therefore such sentence falls dominationally into the sentence initial-dominated group. Some clauses including hypothetical implications in conditional constructions are not always overtly marked by *sapos*. Conditional clauses in Tok Pisin are basically very much the same as in English, but not all sentences can behave like that. The author believes people should be grouped together by context and linguistic environments in the use of conjunction. The aim of this paper is to consider nature of *sapos* in Tok Pisin. Section 1 considers subordinate clauses based on the previous studies. Section 2 attempts to examine various kinds of sentences as viewed from linguistic typology. Section 3 analyses subordinate clauses by using syntactic and semantic operations. Section 4 explains the nature of *sapos* in Tok Pisin compared to other pidgin and creole languages. All these things make it clear that the sentence initial-dominated group are some of the least transparent of *sapos*, and the conjunction not preposed in the sentence-initial position most transparent. And the sentences without *sapos* can be observed in the informal context.

Key words: subordinate clause, conjunction, sentence-initial, context, Tok Pisin

1. はじめに

トク・ピシンの *sapos* は、従属節を導く接続詞だが、その多くが主節に先行する。本論文では、これを従属節先行型と呼ぶ。このトク・ピシンの *sapos* は、英語になぞらえると、*if* に相当し、条件節を導くものである。本論文では、この種の節を従属節と呼ぶが、過去の論文に触れる際は、条件節や副詞節という用語も用いる。

多くの文法書や辞書では、従属節が主節に先行する例文が取り上げられる。例えば、Dutton (1973: 133) も *sapos* は通常、文頭に生じ、*orait* がそれに続くとして記している。他の文法の説明でも同様に、Mihalic (1971) や Sadler (1973) には、下記の用例 (1) と (2) が挙げられている。

まず例文 (3) は、日本がイリアンジャヤ（ニューギニア島の西半分）の購入に意欲を見せていることをオランダの新聞が報じたもので、それをワントック新聞が取り上げている。

- (3) Ol i tok Japan i bin makim 15 billion
 3pl PM say Japan PM PAST appoint 15 billion
 U.S. dola long ol Indonesia **sapos** ol i orait long dispela tingting.
 U.S. dollar P PL Indonesia C 3pl PM all right P DP idea
 「オランダの新聞によると、日本がこの提案に同意すれば、インドネシア政府に 150 億ドルを支払う約束をすると報じた」(WANTOK-Trinde, 7 Jun 1972-Pes 11)

例文 (4) は、投稿者が家族の間の悩み事をワントック新聞の編集委員に寄せたものである。やはり従属節が後置されていることがわかる。

- (4) Bai mi mekim wanem **sapos** mama na papa i
 FTM lsg make what C mother C father PM
 no laikim mi, na tupela i laikim brata bilong
 NEG like lsg C two PM like brother GEN
 mi tasol.
 lsg just

「両親が僕を嫌い、僕の弟だけを愛したら、僕はどうしたら良いのか」

(WANTOK-Trinde, Julai 5, 1972-Pes 3)

多くの文法書では、従属節が主節に先行する例文を取り上げていることが多い。実際の使用例を新聞や物語を通して観察しても、同様の傾向を示していることは先に述べた。しかし、そうではない用例も散見されることから、そこには何らかの条件が存在するものと思われる。つまり、従属節が後置される場合は、有標の構文として、何らかの条件が重なったときに生じているのではないかということである。したがって本論文では、トク・ピシンの従属節が後置されるときの条件について考察する。

2. トク・ピシンの言語類型論的特徴

本題に入る前に、言語類型論の分野では、トク・ピシンのような言語はどのようなタイプに分類されるのか、考えておきたい。角田 (1991) によると、「日本語では主節の動詞は必ず文末に来る」(p. 23) とし、「もし、従属節の要素が主節の動詞の後に来ると、一旦文を言い終えてから、付け足した感じがする」(p. 26) と述べている。つまり現代日本語では、条件節が常に主節

に先行する。同様に英語やタイ語も、日本語の条件節を含む語順の性質に近いとする。角田が調査した世界の言語 130 言語の語順の表によると、日本語と同様の条件節を含む統語的振る舞いをする言語は、朝鮮語や蒙古語など、全部で 65 言語ある。これは全体の 50%あり、日本語はごく普通のありふれた語順を有する言語と言える。

次に、従属節先行型も従属節後行型も一般的ではあるけれども、どちらかと言うと、従属節先行型のほうが優位な言語として、マリ語やアプハズ語など全部で 56 言語ある。これは全体の 43.1%を占める。

三つ目のタイプとして、やはり従属節先行型も従属節後行型も一般的ではあるけれども、どちらかと言うと従属節後行型のほうが優位な言語がある。このタイプはフィンランド語やセルボクロアチア語など、全部で 3 言語ある。これは全体の 2.3%である。

最後に、「不明」として処理されている言語が 3 言語、従属節先行型は一般的だが、従属節後行型については不明としてクエスチョンマークが付された言語が 1 言語ある。

上記の表にトク・ピシンは取り上げられていないが、筆者の調査からトク・ピシンは日本語と同じ、従属節先行型に分類されると考えて良いであろう。ただ、従属節後行型もたしかに存在しており、この場合、日本語のそれと同じように、「付け足した感じ」(p. 23) や英語のそれと同じように、角田がとあるアメリカ人から引き出したように、「もし」という仮定が強調される」(p. 23) ニュアンスがあるのか考えてみたい。ジーニアス英和辞典 (1988: 845) には、I'll help you if you come. 「来るならば助けてあげるよ」を条件的、If you come I'll help you. を勧誘的とし、条件節が前に来るか後に来るかで、意味上の相違があると記している。

次の第 3 節では、トク・ピシンの従属節後行型が生じる言語環境を探る。

3. トク・ピシンの従属節後行型の生じる条件

ここでは、*sapos* の文中での振る舞いについて、大きく三つの角度から検討する。まず、構造的な観点から、主節や従属節の長短を考慮し、何らかの規則性があるか検討する。次に、意味の観点から、*sapos* の振る舞いについて考察する。最後に、*sapos* が文中に生じない従属節とは何か、さらに語用論的な視点から、文の発話内容との関連性について調べる。

なお、*sapos* には副詞節を導く場合と名詞節を導く場合とがあるが、本論文では前者の、特に条件を表わす用法を研究対象とする。

3.1 文構造と *sapos*

まず、従属節先行型の場合、その従属節の長短が *sapos* の統語的振る舞いに影響しないことを述べたい。一例を挙げると、下記の例文 (5) は、従属節内に接続詞 *na* があり、節と節を対等の関係で結んでいるが、主節にはそれがなく、S + V が一つだけである。本稿でこれは、従属節が長いと見なす。

- (5) *Sapos* yu laikim bodi i stap klin na
 C you like-VT body PM stay clean C
 i gat gutpela smel, yu waswas long smelsop LUX tasol.
 PM get good smell you wash P smellssoap LUX only
 「もし、身体をきれいに保ち、いい香で包まれないなら、LUX を使って洗いさえすればいいですよ」(Wanto-Trinde, 18 Epril, 1973-Pes 10)

上記の例文 (3) と (4) は、それぞれ従属節が長い。しかし、従属節が短い、上記の例文 (1) は下記の例文 (6) のように従属節を後置させても許容度が下がらない。なぜならばインフォーマント 9 名中、4 名が従属節後行型を選んでいるからである。

- (6) *Mi ken mekim sapos yu laik.*

ただ例外はある。下記の例文 (7) は一般的な表現で、新聞でも物語でも文法書でもよく取り上げられる。これは出現頻度の高い言い方であるが、‘～するのは良くない’ といった定型表現、もっと言えば慣用的な性質を帯びているので、下記のような例文中に生じる *sapos* は従属節先行型にはできず (表 3 にあるように、インフォーマント 9 名中、2 名しかいない)、どちらかと言うと、例外として扱わなければならない文と考えるが、そのような慣用的な性質の高い表現と *sapos* を含む節との関係性について、どの程度、トク・ピシンの話者が、文内における主節と従属節の取るべき位置に規範意識をもっているか探るために調査対象例文の一つとした。

- (7) I no gutpela tumas sapos ol i dring bia.
 PM NEG good too much C 3pl PM drink beer
 「もし彼らがビールを飲んで、車を運転するとしたら、それは本当に良くない」
 (Dutton 1973: 236)

さて、ここでインフォーマントの背景について、整理しておきたい。本論文で取り上げるデータは、筆者が 2023 年 8 月 12 日から同年 8 月 27 日まで、パプアニューギニアのゴロカ地方フィマ村にて、村民 9 名にインタビューをおこなったときのデータに基づいている。

性別は、男性 (5 名) と女性 (4 名) が半々、年代別の内訳は、10 代から 60 代までで、偏らないように配慮した (10 代 1 名、20 代 2 名、30 代 3 名、40 代 1 名、60 代 2 名)。従属節先行型の文を選好した場合は 1、従属節後行型の文を選好した場合は 2 とする。

表2 *sapos*と言語的環境

	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)
10代女 Leonny	1	2	1	1	1	2	2	1	2
20代男 Hector	1	1	2	2	2	2	1	2	1
20代女 Liza	2	1	2	1	1	2	2	2	1
30代男 Wanosa	2	2	2	1	2	2	2	1	1
30代男 Lowake	1	1	2	1	1	2	2	2	1
30代女 Linda	1	1	1	1	2	2	2	2	1
40代男 Ivan	2	1	2	2	2	1	1	2	1
60代男 Kevin	1	1	2	1	1	2	2	1	1
60代女 Roselyn	2	2	2	2	1	1	2	2	1

従属節先行型の選好者の数を整理すると、8 (0人)、7 (0人)、6 (1人)、5 (3人)、4 (3人)、3 (2人) となる。例えば、60代男のKevinについてみると、9例の例文のうち、6例が従属節先行型を選択し、全体の中で一人だけである。どのインフォーマントも、後行型を選好した例文が一定数あり、こうしたことから、日本語の場合のように後から付け足したといった感覚はないのではないだろうか。

3.2 意味の観点から見た *sapos*

次に、発話が行われる場面と *sapos* の関係を見てみたい。下記は、ワントック新聞に掲載された4コマ漫画である。「お魚さん」が高く飛び跳ねているのを不思議に思った「猫さん」が、なぜそんなに高く飛ぶのか「お魚さん」に聞いている。それに対して、「お魚さん」は「カニさん」に自分の体を挟まれたら一大事なので、そういう時は、誰だって高くジャンプするということを強調している。つまりジャンプするのは不思議なことではない、仕方がない、自分の行動は正当である、ということを経験として真っ先に伝えなければ自分の身が危ないのである。少し長めの条件節を先行させて、「猫さん」に説明している間に、「カニさん」に自分の体を挟まれてしまったら元も子もないのである。

「お魚さん」は、「猫さん」の問いかけに対して関連性のあることを述べており、グライスの会話の原則における「関連性の公理」に違反はしていないが、通常の語順と異なっている。「お魚さん」が主節の情報を一刻も早く「猫さん」に伝え、同時に自分の身を守りたかったからに他ならない。

(8)

Maski: Olaboi! Em i wanem samting ya? Em i kalap i go antap moa.

Maski: O, em i pren bilong mi pis ya. Nau mi ken lukim em yet.

Maski: Hei, pren olsem wanem yu save kalap i go antap, antap tru?

Pis: Yu ken kalap **sapos** kuka i holimpasim tel bilong yu.

(WANTOK-Trinde, 4 Julai 1973 Pes 14)

(和訳)

猫のマスク：あらまあ、どうしたっていうの？そんなに高くジャンプして。

猫のマスク：僕の友達の魚君じゃないか！今ならはっきり彼だとわかるよ。

猫のマスク：どうやったらそんなに高く飛べるの？

魚：君だってカニさんに尻尾を挟まれそうになったら高く飛べるよ！

例えば英語では、従属節の内容が真実であれば、それが後置される場合がある²⁾。上記の例文では、「猫さん」の尻尾が「カニさん」に挟まれている場面が4コマ漫画の一つで紹介されており、従属節の内容は紛れもなく事実であることがわかる。ここで注意しなければならないのは、実現可能性の問題である。ここに登場する「カニさん」は池の中で、「お魚さん」の尻尾をそのはさみで挟んでいる。猫さんも陸上で、「カニさん」にその尻尾を挟まれる可能性があるが、この場面はあくまでも池の中であり、猫が池の中で尻尾を挟まれることはない、つまり実現可能性が低いと判断したため、従属節が後置されていると考えられる。

ちなみに、上記の文脈で、従属節を先行させた下記の例文は、9名中、7名が従属節後行型を選択している。下記の例文(9)は、従属節先行型であるが、9名中2名しか選択されていない。こうしたことから、少なくとも日本語の条件文よりも、後行型が生じる範囲が広く、あとから付け足したといったニュアンスはないと読むことができる。

(9) ? **Sapos** kuka i holimpasim tel bilong yu, yu ken kalap.

次に、下記の例文(10)を見てみよう。本例文は、ワントック新聞の投書欄から抜き出した。ニューギニア高地のハーゲン(Hagen)やワバック(Wabag)で夜学を開設し、英語や数学などの科目を学校に設けたいとする内容である。従属節の内容としては、学校で学びたいという人がいればの話だが、といった含みがある。つまり、現時点では実現可能性が低く、問題提起の段階の中での発話と言えよう。条件節は意味論的には、開放条件と却下条件と疑似仮定の三つに分類される。詳しくは大塚・中島(1987: 244)を参照いただきたい。下記の例文(10)は、その実現が疑わしいことが含意されている却下条件に相当すると考えられる。そういう点では、上記の例文(3)も同様である。実際、日本はイリアンジャヤを購入していない。イリアンジャヤは日本の提案に同意しないであろう、といった意味を条件節は含意している。同時に主節の内容も不確かである。

- (10) Mipela bai skul long Inglis na maths na sampela
 1pl FTM teach P English C math C some
 samting moa, **sapos** i gat inap man i laik
 something more C PM get enough man PM like
 kam long skul.
 come P school

「私たちは将来的に英語や数学などの科目も教えたい。学校に来て学びたいという人がいれば」(WANTOK-Trinde, 15 Novemba, 1972-Pes 3)

インフォーマント9名中、6人が従属節後行型を選択している。実現可能性と従属節後行型との間に一定程度の相関関係があることを示唆している。

3.3 並立構造

三つ目に、表面上は文中に *sapos* が生じない例文を検討する。この種の構文は早くから言語学者によって報告されていたが、それがなぜ、どのような条件下で生じるかについての十分な説明は管見では見当たらない。例えば、Hall (1943: 139) では、*sapos* 抜きで、節と節を単に並列させ、表現することも多いと記されている。

下記の例文(11)は、従属節を導く *sapos* がない。ちなみに、英語においても、接続詞 *if* を用いず、二つの文を並立させ、条件文を作ることができる³⁾。例文(11)は、聞き手が *sapos* を復元できるため、容認可能性は高い。インフォーマント9名中、8名が従属節先行型を選択している。また、下記の例文(11)に *orait* が含まれているため、復元可能性が高まる。この文要素は、英語で言えば、‘*If he said so, then it must be true.*’における *then* に相当するもので、*then* を主節の前に付けると一般的には強意的とされている(大塚/小西 1973: 486)。トク・ピシンでは、*Sapos* ~ *orait* の組み合わせによって、因果関係を表わすことができる(Romaine 1988: 149)。

- (11) Yu paitim long hama, orait bai em i bagarap.
 2sg fight P hammar all right FTM 3sg PM bugger up
 ‘If you hit it with a hammar, it will be ruined’.

Sadler (1973: 116)

これは上記の従属節が後置されると、事情が異なってくることを示唆している。インフォーマントの9名中、1名しか従属節後行型を選択しておらず、許容度が高いとは言えない。ただし意味が全く通じないわけではない。

(12) ? Bai em i bagarap, yu paitim long hama.

次に、これまで取り上げた例文において、どこまで *sapos* を省略することができるか検討してみたい。下記の表3は、*sapos* の省略と文の許容度を示すものである。まず、左端の数字は例文の番号を表し、その隣の二つ目の列は、*sapos* を含む例文が従属節先行型か従属節後行型の文かを表し、該当するほうを+で表記した。そして最後に、文の許容度を9人のインフォーマントに点数化してもらい、その平均値を記した。5点が一番許容度の高い文で、1点が一番許容度の低い文である。その真ん中に3点がある。

表3 *sapos* の省略と文の許容度

	従属節先行型	従属節後行型	文の許容度
(1)	+		3.9
(2)	+		1.4
(3)		+	3.4
(4)		+	1.9
(5)	+		4.2
(7)		+	1.2
(8)		+	3.3
(10)		+	4.8

上記の表3からいくつかの傾向が見て取れる。まず *sapos* は全体として、従属節後行型よりも従属節先行型のほうが省略しやすいことがわかる。例は、(1), (2), (5)。文の復元可能性が大きく関わっていると思われる。また、全体として、インフォーマント9名中8名が、次の傾向を見せていることに気づく(高>低>高>低>高>低>高>高)。例えば、例文(5)における *sapos* は従属節先行型の文であるが、文中に生じる *sapos* が省略された文に対する許容度が5点満点中、4.2ある。これは全体の中でも許容度の高い方である。おそらく、復元可能性という条件が、*sapos* を省略できるかできないかを左右するのであろう。

次の第4節では、別角度から、条件文の性質を探り、第3節との関連を調べてみたい。

4. ピジン・クレール諸語と条件節

Meakins (2021) は、豪州内の接触言語の比較、さらには豪州とメラネシアの接触言語の関係性について、その起源や拡散の仕方、そして基層語理論そのものについて、先行研究を十分に踏まえながら歴史的に考察している。そういう意味では、本論文でも両者の関係性が濃い接触言語同士を比較するのも一案である。しかし、ここではトク・ピジン以外の英語基盤のピジンやクレオールをいくつか取り上げ、条件節を含む複文について考えたい。つまり、トク・ピジンとは歴史的・社会的成立の背景が異なる英語基盤の接触言語を取り上げ、それらを比較した結果、トク・

ピシンと同じような傾向を観察できるのであれば、少なくとも英語基盤の接触言語における、普遍的な特徴を見出すことができるかもしれない。

英語基盤のクレオール語として知られるノーフォーク語においても、従属節をめぐる統語的な振る舞いはトク・ピシンと類似の傾向がみられる⁴⁾。詳述すると、従属節先行型が76例中51例(67.1%)、従属節後行型が25例(32.9%)となっており、トク・ピシンと類似の傾向を見せている。

これらの用例とは別に、文中に従属節を導く接続詞 *ef* が表面上現れない例が17例存在したが、そのすべての文が、従属節先行型の文であった。こうしたことから、ノーフォーク語の接続詞 *ef* を含む基本語順として、従属節先行型の構文のほうが、より基本的な語順と言える。Buffett (1999) も、下記(13)のような例、つまり接続詞なしに単に節と節を並列させて、複文を表わすのはふつうであると述べている。

(13) Yu nor dana laaf yu gwen a' teya.

'If you don't stop laughing you'll split yourself.'

Buffett (1999: 62)

豪州トレス海峡諸島のクレオール英語を研究した、Shnukal (1985: 167) によると、接続詞のない例文はクレオール語話者の特に高齢世代からよく聞かれる特徴だという。接続詞 *ip* を含む複文は若者世代が先導しているようである。こうしたことから言語接触の初期の段階では、接続詞 *ip* は現れず、英語との接触が長期にわたって継続される中で、それが定着していくと読むこともできる。本論文では議論しなかったが、年代差といった社会的属性との関連も注意が必要かもしれないが、別稿に譲りたい。ただ、ポストクレオール連続体で言うところの基層語 (basilect) において接続詞が生じず、当該社会が英語話者と長期にわたって接触し、その基層語が中層語 (mesolect) や上層語 (acrolect) の特徴を有するにつれて接続詞が現れるというわけではないことにも注意したい。なぜならば、この種の構文は英語でも生じるからである。なお、近年におけるクレオール連続体に関する議論は、Patrick (2008) に詳しい。

少々脱線したが、再び接続詞が省略される構文に戻りたい。この *ip* の省略が起きるのが、条件節先行型であることから、英語基盤のピジン語やクレオール語においては、条件節先行型の語順がより基本語順と言えそうである。

(14) a. Ju kaikai pinis, ju go kaikai diswan.

b. Ip ju kaikai pinis, ju go kaikai diswan.

'If you eat up all your food, you can have these [chips].'

Shnukal (1985: 167)

上記の例文(14)と同じように、トク・ピシンの *sapos* が省略されるのは、条件節先行型におい

て起きやすい。Mühlhäusler (2003: 24) は、*sapos* が省略されるのは、*sapos* を省略しても文脈からそれがわかる場合にそれが起きると述べる。しかし語順に関しては、従属節後行型と先行型の語順が可能と言及するのみで、その違いについての説明がない。実際、本稿における筆者の調査から、条件節先行型ばかりでなく、条件節後行型においても、*sapos* の省略は可能であることがわかったので、条件節を含む典型的な例文のみを文法書で取り上げるのは良くないであろう。

ナウル共和国のピジン英語を研究した Siegel (1990: 164, 167, 171, 182) は下記の例文を取り上げている。本論文のテーマと関係のある例文が全部で五つあるが、そのすべての例文において、従属節を導く接続詞が存在しない。そのうちの一つが下記の例文 (15) である。

(15) Yu no lai okei,,,no lai orait okei

'If you don't tell lies, OK,,,If you don't lie, it's all right, OK' Siegel (1990: 164)

これは、節と節を並立させているだけの表現である。ナウルのピジン英語は成立してから約1世紀の歴史があるものの、クレオール化しておらず、先の Shnukal の説明に即して言うならば、初期のクレオール語話者に接続詞抜き条件文が多いとするならば、ナウルのピジン英語も、今後接続詞が付随する可能性がある。仮定の話をしては仕方がないが、島内にはメラネシア系のピジン英語を話す話者も一定数おり、そのような背景を持つ話者との接触が継続されれば、統語レベルでの変容も起きうると考える。現時点では、ピジン英語が商店やレストランでの使用に限定されており、加えて、英語話者との日常的な接触がないこと、つまり、言語使用域の不拡大も接続詞の不在と関係があるかもしれない。

結語

以上の分類と分析から、まず、従属節先行型の場合、その従属節の長短が *sapos* の統語的振る舞いに影響しないことがわかった。

二つ目に、従属節の内容が、現時点では実現可能性が低い場合、*sapos* 後行型を誘発する可能性があることもわかった。

三つ目に *sapos* は全体として、従属節後行型よりも従属節先行型のほうが省略しやすいことがわかった。文の復元可能性が当該構文の出現を大きく左右すると思われる。これはつまり、復元可能性という条件が、語順のもつ規則性を上回っている証左ともいえる。

最後に、英語基盤のピジンやクレオール語においては、条件節先行型の語順がより基本語順と言えることも指摘した。

注

* 本論文中で使用されている略語一覧：

C, Conjunction; 2sg, second singular subject; PM, Predicate Marker; NEG, Negator; FTM, Future Tense Marker; AUX, Auxiliary; PAST, Past Tense Marker; PL, Plural; P, Preposition; 3pl, third person singular subject; 1sg, first person singular subject; 1pl, first person plural pronoun subject; 3sg, third person singular subject; Vt, Verb Transitive; DP, Demonstrative Pronoun; GEN, Genitive

- 1) トク・ピシンについては、Atkin (1973), Crowther (1978), Evangelical Brotherhood Church (1977), Kavap (1974), Sievert (1980), Trobisch (1963) の資料から用例を抽出した。詳しくは参考文献を参照されたい。
- 2) 大塚高信 / 中島文雄監修 (1987) 『新英語学辞典』東京：研究社、p. 244 を参照した。
- 3) 例えばHall (1943) では、条件節を導く *sapos* について、‘often expressed by simple juxtaposition of cl.’ 「節を並立させることもたびたびある」(p. 139) と説明している。1980年代に出版された、Romaine (1988) の研究書にも、… hypothetical clauses in conditional constructions are not always overtly marked by *sapos*, (p. 149) 「条件文において、仮定の意味を含む節はいつも *sapos* が生じるとは限らない」とし、明確な説明がなされているとは言えない。
- 4) ノーフォーク語については、Buffett (1999), Palmer (1986), Christian (1986) から用例を抽出した。詳しくは参考文献を参照されたい。

参考文献

- Atkin, R. (1973) *Jisas i givim tok bokis long Papua Niugini*. Madang: Kristen Pres.
- Baker, P. & Huber, M. (2017) Extracts from ‘Atlantic, Pacific, and World-Wide Features in English-Lexicon Contact Languages’ In Farquharson, J.T. and Migge, B, ed. *Pidgins and Creoles*. London and New York: Routledge, 290–330.
- Buffett, A. (1999) *Speak Norfolk Today: an encyclopaedia of the Norfolk Island language*. Norfolk Island: Himii Publishing Company.
- Christian, E. (1986) *From Myse Randa*. Norfolk Island: Photopress International.
- Crowther, B. (1978) *Samting bilong bus i krai*. Wewak: Christian Books Melanesia Inc.
- Dutton, T.E. (1973) *Conversational New Guinea Pidgin*. Pacific Linguistics Series D-No. 12. Canberra: Australian National University.
- Evangelical Brotherhood Church (1977) *Bel bilong man*. Lae: Christian Publications.
- Franklin, K.J. (1968) *Tolai Language Course*. Ukarumpa: Department of Information and Extension Services Territory of Papua New Guinea in co-operation with The Summer

- Institute of Linguistics.
- Hall, R. (1943) *Melanesian Pidgin English: Grammar, Texts, Vocabulary*. Baltimore: Linguistic Society of America.
- Kavap, J. (1974) *Kas bilong yu*. Port Moresby: Papua Pocket Poets.
- 小西友七編集主幹 (1988) 『ジーニアス英和辞典』 東京：大修館書店
- Meakins, F. (2021) Australia and the South West Pacific. *The Routledge Handbook of Pidgin and Creole Languages*. London and New York: Routledge, 88–105.
- Mihalic, F. (1971) *The Jacaranda Dictionary and Grammar of Melanesian Pidgin*. QLD: The Jacaranda Press.
- Mühlhäusler, P, Dutton, T & S. Romaine (2003) *Tok Pisin Texts: From the beginning to the present*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 大塚高信編 (1970) 『新英文法辞典』 東京：三省堂
- 大塚高信・小西友七 (1973) 『英語慣用法辞典』 東京：三省堂
- 大塚高信・中島文雄監修 (1987) 『新英語学辞典』 東京：研究社
- Palmer, N. (1986) *A Dictionary of Norfolk Words and Usages*. Norfolk Island: Photopress International.
- Patrick, P. L. (2008) Pidgins, Creoles, and Variation. *The Handbook of Pidgin and Creole Studies*. MA: Wiley-Blackwell, 461–487.
- Peters, P. (1995) *Australian English Style Guide*. Cambridge: CUP.
- Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, S & Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London and New York: Longman.
- Romaine, S. (1988) *Pidgin and Creole Languages*. London and New York: Longman.
- Sievert, J. (1980) *Kisim save moa. Wewak*: Christian Books Melanesia Inc.
- Sadler, W. (1973) *Untangled New Guinea Pidgin*. Madang: Kristen Pres.
- Siegel, J. (1990) Pidgin English in Nauru. *JPCL*. 5: 2, 157–186. Amsterdam: John Benjamins, 157–186.
- Trobisch, W. (1963) *Mi laikim wanpela meri na mi pren long em*. Madang: Kristen Pres.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 東京：くろしお出版

【付記】 本稿は、日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）課題番号：20K00573、2023年度-2025年度、『ナウル共和国および豪州ブリズベンにおける言語接触・言語保持の研究』（研究代表者：岡村徹）の助成を受けている研究に基づく。

Appendix 1: Personal Information: Please provide information on yourself by ticking off the appropriate box in each item below.

1. Age:

- | | | | |
|-------|--------------------------|--------------|--------------------------|
| 10-19 | <input type="checkbox"/> | 20-29 | <input type="checkbox"/> |
| 30-39 | <input type="checkbox"/> | 40-49 | <input type="checkbox"/> |
| 50-59 | <input type="checkbox"/> | 60-69 | <input type="checkbox"/> |
| 70-79 | <input type="checkbox"/> | 80 and above | <input type="checkbox"/> |

2. Sex: Male Female

3. Place of birth

- PNG born: Which part of PNG _____
- Not PNG born: Where _____

4. Mother tongue _____

5. Other languages spoken _____

6. How long have you been living here in Fima village? _____

7. Name: _____

Appendix 2: Which Tok Pisin sentence is more common for you in each pair?

(1) **Sapos** yu laik, mi ken mekim. ①

(2) Mi ken mekim **sapos** yu laik.

.....

(1) **Sapos** em i no kisim save, bambai em i no inap kisim gutpela wok. ②

(2) Bambai em i no inap kisim gutpela wok, **sapos** em i no kisim save.

.....

(1) Ol i tok Japan i bin makim 15 billion U.S. dola long ol Indonesia **sapos** ol i orait long dispela tingting. ③

(2) **Sapos** ol i orait long dispela tingting ol i tok Japan i bin makim 15 billion U.S. dola long ol Indonesia.

.....

(1) Bai mi mekim wanem **sapos** mama na papa i no laikim mi, na tupela i laikim brata bilong mi tasol. ④

(2) **Sapos** mama na papa i no laikim mi, na tupela i laikim brata bilong mi tasol, bai mi mekim wanem.

.....

(1) **Sapos** yu laikim bodi i stap klin na i gat gutpela smel, yu waswas long smelsop

LUX tasol. ⑤

- (2) Yu waswas long smelsop LUX tasol, **sapos** yu laikim bodi i stap klin na i gat gutpela smel.

.....

(1) I no gutpela tumas **sapos** ol i dring bia. ⑥

(2) **Sapos** ol i dring bia i no gutpela tumas

.....

Maski: Olabo! Em i wanem samting ya? Em i kalap i go antap moa.

Maski: O, em i pren bilong mi pis ya. Nau mi ken lukim em yet.

Maski: Hei, pren olsem wanem yu save kalap i go antap, antap tru?

Pis: (1) Yu ken kalap **sapos** kuka i holimpasim tel bilong yu. ⑦

(2) **Sapos** kuka i holimpasim tel bilong yu, yu ken kalap.

.....

(1) Mipela bai skul long Inglis na maths na sampela samting moa, **sapos** i gat inap man i laik kam long skul. ⑧

(2) **Sapos** i gat inap man i laik kam long skul, mipela bai skul long Inglis na maths na sampela samting moa.

.....

(1) Yu paitim long hama, orait bai em i bagarap. ⑨

(2) Orait bai em i bagarap yu paitim long hama.

(3) Bai em i bagarap yu paitim long hama.

Appendix 3: How many points did you get in each sentence?

- 1 (Sapos) Yu laik, mi ken mekim.
- 2 (Sapos) Em i no kisim save, bambai em i no inap kisim gutpela wok.
- 3 Ol i tok Japan i bin makim 15 billion U.S. dola long ol Indonesia (sapos) ol i orait long dispela tingting.
- 4 Bai mi mekim wanem (sapos) mama na papa i no laikim mi, na tupela i laikim brata bilong mi tasol.
- 5 (Sapos) Yu laikim bodi i stap klin na i gat gutpela smel, yu waswas long smelsop LUX tasol.
- 7 I no gutpela tumas (sapos) ol i dring bia.
Maski: Olabo! Em i wanem samting ya? Em i kalap i go antap moa.
Maski: O, em i pren bilong mi pis ya. Nau mi ken lukim em yet.

Maski: Hei, pren olsem wanem yu save kalap i go antap, antap tru?

Pis: (8) Yu ken kalap (**sapos**) kuka i holimpasim tel bilong yu.

- 10 Mipela bai skul long Inglis na maths na sampela samting moa, (**sapos**) i gat inap man i laik kam long skul.